

## CKJS だより

第44号

校長 松平 昭二

shoji\_matsudaira@hotmail.co.jp

## 途切れた文化

今どき「宿題」がこれほど教育の話題になろうとは思ってもみませんでした。「学びのすすめ」に始まり、国際学力比較調査では子どもの家庭学習時間が最低であることが指摘されました。ついでに言えば、家庭でのテレビの視聴・テレビゲームの時間は、これとは全く逆で世界最高でした。

結果として、「学力向上は学校だけでは限界があります。こんなに家庭で勉強しないのでは、宿題をもっと出さなくては……」というわけです。

宿題を出すことの是非をここで論じたいのではありません。宿題がこんなに話題になること自体が驚きです。というのは、日本には昔から「10分×学年」という確固たる「宿題文化」があったからです。

小学校1年生は「10分×1学年=10分」、6年生は「10分×6学年=60分」を目安に、毎日宿題を出すというのが、教師に継承されてきた文化でした。

宿題の中身には何の規制もありませんでした。ドリルや書き取りもあれば、自由学習もありました。教師の都合や考えで出されました。ただし、宿題の量は毎日先の公式に基づいて出されました。

宿題は、学習の習慣付け、学習の規律を養うためにあったからです。今ふうに言えば、「自主的、自発的な学習態度の育成」にありました。その先には、「人生いつも勉強だ」という生涯学習にもつながる文化がありました。

新井白石の『一粒の米』の逸話が思い出されます。幼少の頃の白石を父が戒めてこう言いました。「米びつから一粒だけ米を取っても減ったとは分からない。逆に一粒入れても増えたかどうか分からない。しかし、一年、二年続けると増減が分かってくる。学問も同じ。一日勉強したから利口になるというわけではない。一日怠けたから愚かになるのでもない。しかし、一年、二年続けば、必ず変わってくる」

こんな勤勉に価値をおく文化は、いったいどこに行ったのでしょうか。

